

# 医療言葉の壁解消へ力

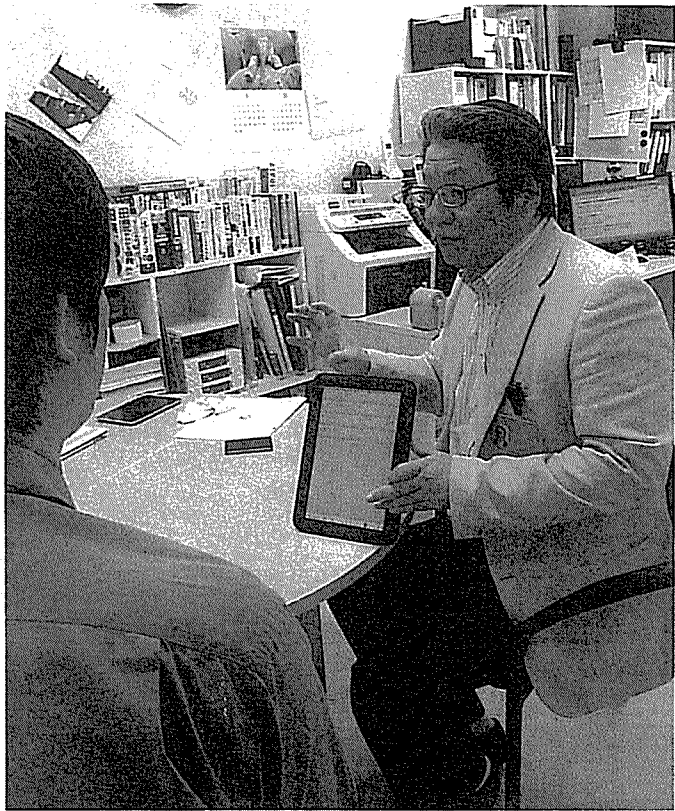
## 問診楽々 翻訳アプリ



隣の外国人 \* 11

外国人家族の日本での生活が長くなると、病院に通院・入院する機会も多くなる。言葉の問題で意思疎通がうまくできず、「病院に行きづらい」と感じる外国人や、「診察に苦勞した」と振り返る医療関係者は少なくない。医療現場でも、「言葉の壁」をなくす様々な取り組みが行われている。

■22か国に対応  
「頭痛がする」とあります。「耳鳴りがしますか」。スマートフォンに日本語とハンゲルで質問が併記され、韓国人が答えていくと日本人医師にも分かる。



無料の医療翻訳アプリ「ヘルスライフパスポート」。群馬大医学部付属病院システム統合センター研究員の滝沢清美さん(55)を中心に、滝沢さんが理事長を務めるNPOと同名、システム開発会社などが2012年7月に共同開発した。

22か国語に対応し、外国語と外国語を連言することもできる。日本人が海外で受診する際や、聴覚障害者にも有効なツールだ。

■ニユアンスもつかむ  
滝沢さんが開発を思い立ったのは03年。システムエンジニアとして働いた電算機メーカーを退社後、多言語の問診をパソコンで行う電子健康手帳の研究などに携わっていた。「もっと簡単に利用できるツールを開発すれば、多くの人が助かるのでは」と考え、アイデアを温め始めた。

その後、テレビ電話での遠隔医療通訳システムなどを手がけるうち、スマホの普及に伴ってアプリの開発に行き着いた。

問診項目を決めるため、小児科や外科など20科で聞き取り調査を行った。翻訳には各国の約

500人に協力してもらった。最も苦労したのは「わずかなニユアンスも間違えないこと」。外国人患者の診察に同席した際、通訳が「白血球が少ない」を誤って「白血球と誤るを目の当たりにし、「翻訳のちよっとしたミスが大きな間違いにつながる」と気を引き締めた。

調査に協力した群馬医療福祉大看護学部助教授の長嶺めぐみさん(31)は「めまいや頭痛といった一つの症状でも、耳鼻科や脳外科など科によって質問の方向が違ふ。問診内容がどう展開するのか考えながら聞き取りをした」と振り返る。

■様々な分野に活用へ  
滝沢さんは現在、アプリの機能を活用し、看護師が使う会話集の電子書籍を作成中だ。外国人が自分の端末から母語で緊急通報を行うと、消防や警察に日本語で伝わる緊急通報システムなど、様々な分野への応用も検討している。

滝沢さんは「7年後には東京五輪もある。情報弱者向けインフラを充実させる手段になれば」と開発を急ぐ考えだ。

## 通訳、患者と疎通仲立ち

交通事故の救急救助訓練に参加した医療通訳の女性(左)  
11月6日、昭和村の関越道赤城高原サービスエリアで



■きめ細かく  
アプリで簡単な問診はできて、病気の告知や治療方針の説明はできない。医師と患者、その家族の間を立ち、きめ細かな意思疎通を仲介する「医療通訳」の充実も求められている。

11月6日、昭和村の関越道赤城高原サービスエリアで、交通事故の救急救助訓練が行われた。渋川広域消防本部などに加え、ポルトガル語や中国語などの医療通訳7人が初参加した。

けが人10人のうち4人が外国人との想定。「どこから来ましたか」「痛いところは何？」。英語で話しかけ、通じなければ別の言語に切り替える。聞き取った内容を医師や救急隊員に伝える。治療の優先順位付けに生かされる。

ある看護師は「言葉が全く分からずパニック状態だった。医療通訳がいてほっとした」と話す。同消防本部消防司令補の大淵浩好さんは「救急車には通訳アプリが入ったタブレット端末があるものの、細かな患者の変化を把握するには医療通訳が必要」と訓練の教訓を語った。

■ボランティア頼み  
県が医療通訳の養成を始めたのは06年度。今では養成講座を受けた8言語・16人が登録され、07年度に12件だった派遣は12年度13件に増えた。

ただ、派遣先は、医療事故が発生した場合に医療通訳の責任を問わないこと同意した15病院などに限られる。医療通訳はボランティアのため、仕事の都合で派遣できない場合や言語で

対応できる人がいないこともある。突発事故や災害時には、対応がさらに困難だ。

■チーム医療の一員へ  
「祖国の土をもう一度、踏みたい」。医療通訳3年目の女性は、末期がん患者のそんな願いをかき取るべく、帰国準備の通訳にあたったことがある。

来日した家族は、「これまでの病状の変化や費用、患者にとって「危険なフライト」になる恐れがあること」を伝えた。女性は「いろいろな内容を伝えなければならなかった。今後、人の死に立ち会ったことがあるかもしれない。医療通訳としての覚悟を試される経験だったと振り返る。

女性は、医療通訳が「チーム医療の一員となること」を希望している。病院が医療通訳を常駐させる場合に診療報酬の加算対象とするなど「制度改善が必要」と訴える。自らも、専門知識の習得と通訳技術の向上に努めるつもりだ。

④医療用の翻訳アプリについて説明する滝沢無料翻訳アプリの画面。併記されている日本語とハンゲル日本語と英語併記された付録病院システム統合センター

No.1

頭痛がするかどうかありますか?  
두통이 난 적이 있습니까?

いつも  
2월

2월

2월

2월

2월

No.2